

# 博士論文の要約

氏 名： 小 熊 誠

学 位 論 文 題 目： 「沖縄における門中の歴史民俗的研究」

全文を公表できない理由： 論文全体を書籍として出版するため

書 名 （ 雑 誌 名 ）： 『沖縄における門中の歴史民俗的研究（仮題）』

出 版 社 名： 第一書房

発 行 予 定 日： 2021年9月

沖縄の門中は、歴史的であり、かつ多様な存在である。

沖縄における門中という存在は、共通の祖先を持つ、あるいは共通の祖先と思われる人物を共有する人びとの集団と考えることができる。この門中という組織は、近世における琉球士族の間で成立したということが明確であり、明治以降、沖縄の非士族系である百姓系の人びとの間で新たに門中が形成されてきたことも事実である。したがって、沖縄の門中は歴史的に形成された多様な存在である。しかしながら、従来の門中に関する研究には、近世から現代まで通時的にその変遷を検討する研究視点はほとんど見られず、多様な門中を全体的に検討する研究もなかった。

本論文では、二つの目的を持つ。第一に、近世沖縄の士族門中の成立とその組織構造について、中国の宗族および幕藩体制における武家の家と比較しながら、「間<sup>はざま</sup>」の民俗」として検討するものである。近世琉球士族の間では、門中の一族を記録した家譜が作成されていた。この家譜は二部作成され、一部は公的文書として王府に提出され、もう一部は門中の宗家で保管された。この家譜は、明治以降王府の廃止とともに散逸し、門中保管の分はそれぞれの士族門中で個別に保管されたが、沖縄戦などでかなり消滅している。それでも、現存するものや、あるいは写筆されたものが残されている。それをもとに、近世琉球士族の門中についてはその集団の構成などかなりの部分がわかる。

門中の組織は、近世士族の間で形成されたわけだが、その士族門中の基本的な構造を検討することは、その後の現在における門中の変化や動きを考える上でも必要な事項である。さらに、日本と中国の間に置かれた近世沖縄が、政治的、経済的關係に加えて文化的にも双方の影響を受けつつ近世社会を構築していったわけで、近世琉球の士族組織を検討するうえで日本と中国の家族・親族組織と比較して考察することが必要となる。その上で、近世士族門中の特徴が浮かび上がることになる。近世士族門中の研究は、本論文の第2部で検討するが、その資料と視点は歴史的なものである。歴史学の研究も参考にしつつ、社会文化的な門中という組織を、中国姓と名乗頭の導入とその意味は何か、同姓不婚はどうであったのか、異姓不養は実際に守られたのかなど当時の琉球士族の生活に即した部分を対象とする民俗学的方法で検討する。したがって、本論文の題目にあるように、本論文の研究は歴史民俗的な視点で行うこととする。

本論文の第2の目的は、現在における沖縄の門中の多様性を全体的に検討し、その相互の結びつきを「つながり」という概念で検討することである。現代における門中は、士族系門中および百姓系門中に分類でき、それぞれ成立経緯も組織の在り方も異なる。現在も、琉球時代の士族を祖先とする門中は継続して存在しており、それを「士族系門中」と称する。しかし、その組織や活動などは近世とは異なり、門中ごとにさまざまである。たとえば、中国渡来人を始祖として那覇の久米村に士族として居住していた門中がいくつかあり、これを士族系門中の中で特別に「久米村系門中」と称す。その中には、近世琉球の家譜を明記し、さらに明治以降の子孫を受け継いで現代に至る系譜を整えた門中の家譜を編集し、その集団で門中会を組織して、始祖を祭る清明祭を大規模に行っている門中がある。

また、士族系門中から派生した「屋取系門中」が存在する。琉球士族は、身分を示す戸籍とも言うべき家譜を作成し、琉球王府における官僚としての地位を持ち、首里・那覇の町方に住むことが決められていた。しかし、近世後期から士族の子孫全てに王府の地位を与えることができなくなり、士族の一部が地方に帰農し、士族の身分を離れる人びとが出てきた。この人びとは屋取と呼ばれ、屋取の人びとで屋取集落を形成した。現在、その子孫によって「屋取系門中」が形成されている。

また、琉球時代の祖先が士族身分であった士族門中のほかに、祖先が平民としての百姓身分であった「百姓系門中」が多く存在する。前者は近世から継続している集団で、後者は明治以降成立した集団である。それだけではなく、前者は家譜があり、後者にはそれがない。両者にはまだまだ違いはあるが、現在の沖縄の人びとはどちらも門中(ムンチュウ)あるいは一門(イチムン)と言って、自分の一族は士族あるいはサムレーの門中であるとか、そうでないという区別は認識できる。しかし、沖縄の人びとにとって自分の門中を知ればいっわけ、他の門中との違いを問題にすることはない。

ところが、多くの門中を集団の外から見ていくと、祖先の身分によって士族系門中とそうでない百姓系門中という区別だけではなく、そのなかでも祖先のあり方、組織のあり方、

活動など実態はかなりの違いを持っている。この点を踏まえて、1960年代から80年代に社会人類学を中心に行われた門中研究の方法とその定義の二点において、本論は新たな視点で門中研究を展開した。

第1点は、門中研究の方法である。従来は、ある集落あるいはある地域の門中を集中的に研究することが多かった。従来の研究方法では、その地域に関する門中の特性は分析できたが、土族系門中と百姓系門中の違いについて、あるいは土族系門中のサブグループとしての「屋取系門中」との違いなど、沖縄における門中の形態による多様性についてはほとんど研究されてこなかった。門中の歴史および内容の違いを比較して、沖縄における形態の異なる門中を全体的な視点で分析することを、本論の研究方法とする。

第2点は、従来の「門中は共通の始祖をもつ父系出自集団である」という定義を再検討し、このような研究者視点の定義から、沖縄の人びとが実際に門中の祖先をどのように観念しているのかという日常生活の文脈に沿って門中の定義を検討する。

文化人類学あるいは社会人類学における出自による親族研究はすでに終焉を迎え、その批判として文化的な関係論で親族を考える立場が文化人類学で検討されてきた。日常的に集団としての活動がほとんどない門中では、それを父系による親族集団あるいは出自集団という機能構造的側面で捉えるよりも、むしろ祖先と子孫として結びつく人びとの集団として具体的な行為に基づいて検討したほうが、実態により近い門中を把握できる。従来のように、門中を父系出自集団と定義しても、実際には土族系門中のように祖先と子孫が父系出自あるいは父系血縁の記録だけで結びつくわけではなく、屋取系門中や百姓系門中は記憶のない祖先との結びつき、あるいは記憶による伝承で結びつく門中が数多くある。例えば、第9章で検討した王族系の向氏湧上門中は、始祖の親である第二尚氏第二代尚宣威王の墓を清明祭に祭るが、その時に尚宣威王と関わりをもつ屋取系門中や百姓系門中による4つの門中と一緒に清明祭を行う。門中は父系出自集団であると定義することはすでに事実とは異なり、むしろ自分はどの祖先とどのような関係で結びつくのかという門中における祖先と子孫の意識が重要である。それらの門中を結びつける「つながり」は、現代沖縄における門中の一つの特徴を示している。

したがって、沖縄の門中は、人びとによって祖先と子孫としての「つながり」をもつ集団だと本論文では新たに定義することができる。この門中における祖先と子孫の「つながり」は、一つの門中において明確な父系血縁による「つながり」だけでなく、口承あるいは伝説による祖先との「つながり」、琉球神話によって琉球王統を祖先とする「つながり」、あるいは女系元祖による「つながり」や娘の養子を通した「つながり」などさまざまな祖先と子孫の関係があり、さらにその祖先との「つながり」が変化したり、創成されたりすることもある。本論文では、このような門中における祖先と子孫の「つながり」を検討することによって、従来の民俗学あるいは人類学とは異なる日常生活の文脈における沖縄門中の実態を明らかにした。

本論文は、第1部「民俗学研究における沖縄および門中」、第2部「門中の歴史的研究」、第3部「門中の現代的な研究」により構成される。第1部は第1章から第2章、第2部は第3章から第5章、第3部は第6章から第9章の全9章からなる。

第1部では、日本民俗学における沖縄研究史、門中研究史と研究方法を述べ、沖縄における民俗研究が門中研究とどのように関わっているかを検討した。

第1章では、柳田国男の沖縄研究に対する目的が戦前と前後で変化している点を述べた。柳田は、戦前において日琉同祖論と経世済民の思想と関連させて、沖縄は日本民俗学における重要な地域であり、沖縄文化には重要な民俗文化があると位置づけ、沖縄を日本文化の一部と捉えて一国民俗学の方法論を構築した。柳田国男のこの視点は、その時代を背景に近代国家のナショナリズムと結びついた考えであった。したがって、日本と沖縄の関連を意図的に中心に据えた。1920年～21年に沖縄を旅してまとめた『海南小記』には、沖縄が中国と関連したことはほとんど書かれなかった。しかし、その時に柳田が手帳に書いたメモを集めた『南島旅行見聞記』[酒井編 2009]には、進貢船のことや船に描かれる眼が中国の影響であることなどが書かれている。柳田は沖縄と中国の関係は知っていながら、意図的に沖縄と中国の関係は看過し、日本と沖縄の関係を強調した。そして、沖縄を日本の一部として、1930年代に「一国民俗学」の構想を展開した。これは、大正末から昭和20(1945)年まで、近代日本のナショナリズムの中で、日本の民俗学をどのように確立するかという柳田の考えとして、沖縄を日本文化に位置づけようとしたことを見ることができる。

戦後、柳田国男の沖縄文化に対する一面的な視点が批判されるとともに、柳田自身も沖縄研究に対して中国大陸、台湾、東南アジアなど多面的な視点をとるように呼びかけている。柳田は民俗学と民族学の協同という方法論を提唱し、沖縄文化をさらに南の地域と比較する研究の必要性を考えていたが、それが日本民俗学の中で展開するには至らなかった。沖縄を主体にして周辺地域と比較した研究視点は、日本本土の研究者からはなかなか想定されなかったが、むしろ沖縄の民俗全体を知る沖縄の研究者からは自然な形で提起されていた。比嘉政夫は、門中に対して「単なる中国文化の移入や模倣ではなく、そのなかには日本本土の生活様式や、韓国の文化も受容されたことが考えられ、さらに沖縄の土着的な文化のもつ外来文化に対する自立的な取捨選択の仕組みも働いている」[比嘉 2010:158]と指摘している。この視点は、歴史的に沖縄の民俗を捉えた平敷令治も早くから持っており、日本の学問におけるグローバル化が進められる以前から、沖縄研究者には沖縄文化における外来文化の影響を考慮する視点がすでに内包されていた。

日本から沖縄の民俗文化を見る視点ではなく、沖縄から周囲の文化を見る視点をとると、上記の視点は有効である。とくに、近世における琉球の門中を分析するには、日本そして中国の家族・親族制度と比較しながら、琉球ではどのように模索し、選択して、琉球の門中として制定していったのかを解明することが可能である。この視点を「間、の民俗」

として第2部で検討した。

第2部における琉球近世士族門中の研究は、中国および日本の社会制度のどの部分を取り入れて琉球の門中を形成し、活動したかについて「間、の民俗」の視点で検討した。第3章「近世琉球における士族門中」では、近世琉球士族の家譜がどのような原理の下に作成されたか、姓と名乗頭を中心に分析した。琉球王は、15世紀の第一尚氏尚巴志から尚姓による中国姓を有していた。王族の分家や久米村系一族も中国姓を用いていたが、古琉球において全ての士族がそうであったわけではない。しかし、近世になって薩摩藩の支配を受けるようになってから、1689年の系図座設置に至って、王族をはじめ士族系門中は、唐名としての「姓」つまり中国姓と和名による名乗頭を整備していった。

中国姓によって家譜を作成し、それによって門中としての一族を形成していたことは、中国文化の影響を受けていたと言える。しかし、士族が決めた中国姓のあり方とそれと関連した名乗頭のあり方は、琉球独特の門中のあり方を示すと考えられる。首里・那覇士族は家譜作成の際に中国姓を決めたので、始祖が異なっても同じ中国姓を持つ場合がある。とすれば、中国姓が同じでも同じ門中とは限らない。ここが、中国と異なる。それを克服するために、同一門中の中では和名の一字を名乗頭として同一の文字を使う事とした。このように、中国姓と名乗頭が一致してはじめて同一門中であることを琉球士族の基本とした。

近世琉球士族が形成した家譜の系譜は、日本における一子相続を原則としながら、士族の姓として中国姓を取り入れており、名乗頭は父から息子への父系継承を原則にしている。士族の家譜は、日本の家制度と中国の宗族制度の双方のしくみを取り入れて形成されており、その中で琉球士族の家譜、およびそれによって形成された士族門中の特徴を「間、の民俗」として分析した。

第4章の「近世琉球士族門中における姓の受容と同姓不婚」では、近世琉球士族が中国の宗族制度における同姓不婚の原則をどれだけ厳密に受け入れていたかについて家譜を資料として分析した。中国では、姓を同じくする男女は共通の父系血縁を持つため、觀念としての兄弟姉妹として通婚は禁止されていた。近世琉球の士族社会では、系譜作成前後に中国姓を導入したため、中国と異なる点がある。近世士族が同姓不婚に関してどのように対応したか、4点指摘した。

1点目は、同姓が必ずしも同じ祖先を持つわけではないことである。毛氏は、首里・那覇門中で7つ、久米村門中で1つ合わせて8つの門中があり、同姓でも先祖が異なっていた。そのため、同姓であっても名乗頭が異なれば父系血縁が異なるので、通婚は可能であった。ところが、2点目は、首里士族の毛氏門中の中で、同姓で名乗頭も同じである同一門中内の通婚事例がある。これは、まさに中国で守られていた同姓不婚の慣習を受け入れていなかったことになる。しかし、3点目の久米村系門中の場合は、『蔡家家憲』に見られるように中国の儒教思想が浸透し、家譜から150例を調べても同姓婚は行われておらず、同姓

不婚の慣習は守られていた。4点目は、首里士族において、中国姓と名乗頭を同じくする同一門中の中で細かく見ていくと、毛氏の名乗頭「盛」あるいは「安」の同一門中内の通婚が15例あるが、いずれも同一門中内における別の家系間の通婚であったことが指摘できる。同一門中であっても、家系が異なれば婚姻できたことが分かる。逆に、同一家系内の通婚はなかった。家系の違いをどのように認識していたのかが重要な視点である。

以上から、中国における同姓不婚の制度は、琉球士族の間で順守されていたとは限らないことを指摘し、門中と婚姻制度における琉球の独自性について分析した。

第5章「近世士族門中における養子制度の再検討」では、近世琉球士族の養子制度の分析から、中国および日本の養子制度との関連を検討した。琉球士族にとって相続は重要な制度であり、琉球王府の制度によって公的に定められていた。琉球士族における相続制度の根本は、身分と家禄を嫡男一子に相続させるということで、この点は幕藩体制の武家の相続制度と近似していた。とくに、跡目として長子が相続することを基本にしながら、一門親類が理由書を添えて王府に申請すれば次三男でも相続することが可能であったことは、幕藩体制の武家に近い実態があった。

しかし、養子は同姓の門中から決めるべきことが王府から示されていた。それは、中国姓を門中に導入したことにより、養子の制度も中国における異姓不養の慣習を念頭に置いていたためと考えられる。ところが、実態は中国の慣習である異姓不養が完全に順守されていたわけではなかった。本来、系図座制定以前の系図には、琉球の士族であっても、非父系の養子を取ることは多く見られた。17世紀初めに来琉した久米村系士族の毛氏と鄭氏の間ですら異姓の養子が行われた。しかし、18世紀以降は琉球において中国文化の導入が行われるようになり、養子も中国流に異姓不養の慣習を琉球に組み込もうとした。それは、中国姓＝父系血縁という原理を王府が示したからである。18世紀以降、その影響は琉球士族にあったと思われるが、首里・那覇系の士族では、異姓養子の例が家譜から見るができる。久米村系士族の間では、『蔡家家憲』や『嘉徳堂規模帳』に養子は中国と同じように同姓昭穆から取るように示されていて、異姓不養はほぼ守られていたが、若干異姓養子が見られる。

琉球士族において、中国の慣習である異姓不養が完全に順守されていたわけではなかった。その原因は、二点考えられる。一点目は、本来琉球士族には中国姓＝父系血縁の観念が強く導入されていたわけではなく、同姓昭穆の子弟を養子にするという異姓不養の慣習が自分の文化として定着していなかった。二点目は、養子の意味が琉球士族と中国では異なっていた。琉球士族の養子は、あくまでも家系を継承することで、養子は父系血縁という観念が絶対ではなかった。むしろ、「家」を継承しようとした幕藩体制の武家と同じ意味を持っていた。それに対して、中国の養子は同姓の父系血縁を継承することに主眼があった。そのため、「系図座規模帳」では、まず養子は同じ一門からという同門養子を提唱しているが、その後すぐに「同等之親類」でもよいと記されている。親類とは妻や母の親類

で異姓養子になる。さらに、それでも後継が見つからない場合は、「系絶候儀不便二候間」と記され、系絶するのは不便なので新参家あるいは無系から養子を迎えることができると記されていた。いずれにしても、どの養子も王府による吟味を受けた決まりであった。

このように、日中の“間、に双方の属国として存在した近世琉球を視点の中心に置くことによって、琉球の士族は、中国と日本の文化をうまく取り入れて、自分たちの文化を形成していたことが分かる。中国あるいは幕藩体制の影響を受けながら、琉球独自の門中制度を構築したことを分析したが、これはまさに「“間、の民俗」という視点で検討することができたと言える。

第3部では、現代における士族系門中や屋取系門中、そして百姓系門中など多様な門中を調査し、門中の多様性と門中としての「つながり」に関して分析した。第6章「沖縄における門中組織の多様性」では、名護市屋我地島における百姓系門中と屋取系門中のさまざまな形態を検討した。士族系門中の祖先は家譜に記録されているが、屋取系門中では屋取をした始祖以前の祖先が明確でない場合もある。門中としては、士族系の門中とそこから屋取した屋取系の門中は異なる門中(それぞれ独立した門中)を形成している。しかし、士族系門中と屋取系門中は、近世に系統は分かれたが、祖先との系譜は「つながり」を持っている。名護市饒平名の玉城一門は、饒平名での始祖以前における士族の祖先の系譜が不明だったので、専門家に依頼して大正5(1916)年に『伝来記』を作成している。それを関連する士族の家譜と照合すると、かなりの違いが見られる。そうであっても、首里の士族系門中である玉城家と名護市の屋取系門中である玉城家は、祖先との「つながり」があると言うことで、ウマチーには屋取系門中ではあるが遠祖として首里の士族系門中に対して屋我地島から遥拝を行っている。あるいは、屋我地島運天原における屋取系門中の花城家は、士族系門中の花城家本家からどのように屋取したかという系譜がある程度明白で、首里の安里総本家と花城本家に清明の墓参と五月ウマチーの位牌祭祀に戦前から参加している。同じ屋取系門中であっても、その祖先である士族系門中との系譜の明白さは異なり、士族系門中への祭祀の仕方も屋取系門中ごとに違いがある。しかし、いずれにしても屋我地島の屋取系門中は明確な士族系祖先との系譜の記録は持たない。あくまでも、記憶あるいは伝承による士族系門中の祖先との「つながり」しか持たない。それを何らかの方法によって、自分の門中の祖先からさらに家譜で明確にされている士族系門中の上位世代の祖先へと結びつけるために、屋取系門中が士族系門中とより深い系譜の「つながり」を持つようしていることを指摘した。

第7章の「多様な門中とその活動」においては、沖縄各地における士族系門中および屋取系門中、そして百姓系門中の実態から、主に祖先祭祀の活動の相違を検討した。士族系門中では、近世に本家と分家でそれぞれ門中を形成しており、近代以降その門中がそのまま継続している。氏の下位にある「何氏何家」と呼ばれる門中であり、氏の中は兄弟ごとに系統が分かれ、複雑に拡大している。例えば、首里士族系門中の毛氏安里家が大宗家で、

その分家として花城家や与儀家、永村家など家系によって多くの門中がある。清明節などには、大宗の安里宗家をまず拝み、次週に花城本家などの分家系統を拝み、その次に自分のチュチョーデーという祖父などの一族を参拝する。門中内の参加者は、さまざまな地域から来て参拝する。このように、大宗の祖先、小宗の祖先、チュチョーデーの祖先と段階ごとに祭祀するのは、土族系門中における祖先祭祀の特徴と言える。

それに対して、百姓系門中は本家のある集落において祖先祭祀が行われる。ただし、百姓系門中は、その集落に来る前のタチクチ（始祖）に関わる伝承を持っている。南風原町津嘉山では、門中によって旧玉城村のミントンや浦添の英祖王と繋がる歴史上の人物がタチクチだと語られる。そして、自分の祖先を拝む前に、前拝み（マエウガミ）としてその門中のタチクチと言われる琉球神話あるいは琉球歴史の人物を拝みに行く。このことは、第二尚氏より以前の琉球の王統関連と結びつくことになり、百姓系門中が祖先の系譜を超越して琉球の神話に関連する祖先と結びつく点が、沖縄の人びとの祖先観の特徴であると指摘できる。

屋取系門中の研究は、従来ほとんど行われてこなかった。その存在が十分認識されていなかった点や、伝統的な集落と結びつかない点などから民俗学ではあまり注目されなかった。しかし、屋取系門中の人口はかなり多いし、その屋取系の人びとによって構成された屋取集落も沖縄本島中部を中心に多くが存在する。沖縄の民俗を対象とする場合、屋取系の民俗は重要であるし、屋取系門中を対象とした調査は重要である。すでに、屋取門中の研究としては、玉城毅や武井基晃の論考があるが、本論では名護市屋我地島や北谷村の上勢頭、久米村系毛氏の屋取系門中の調査がある。屋取系門中といっても、土族の祖先や土族系門中との関連が明確であったり不明確であったり、さまざまな関連を持っている。しかし、屋取系門中の人びとに共通しているのは、自分たちの祖先は土族であったということであり、土族系に対するアイデンティティを強く持っていることである。したがって、屋取系門中の祖先が、どのように土族系門中の祖先と結びついているかを自分たちの調査や系図専門家によって明確にし、自分の祖先である土族系門中との系譜の「つながり」を持つとうとする屋取系門中が多い。この傾向が、屋取系門中の特徴と言える。

このように、沖縄では近世における祖先の身分の違いによって、土族系門中と百姓系門中、そして屋取系門中に分類され、それぞれの門中が近代以降、拡張すると同時に変化している。その一つの方向性として、屋取系門中や百姓系門中が、口承による祖先をどのように土族系門中の祖先と結びつくかを調べ、相互の門中の「つながり」がどのように形成されるかを新たな門中研究の視点とすることができる。

第8章の「門中をめぐる諸相」では、沖縄の門中における祖先祭祀に関わる諸相を述べた。沖縄でも、祖先を祭祀するには位牌が重要である。沖縄の位牌は、神主式や屏主式など変化があり、さらに日本の位牌とも異なる特徴がある。各家にその家の祖先の位牌はあるが、門中のムートゥヤー（本家）では、位牌を置いてある仏壇の隣に香炉を置く神棚が



ある。このような神棚は、祖先神を祭っているとわれ、士族系門中にも百姓系門中にも祭られている。前者は、門中の祖先と関係ない男神と女神を祭ることが多いが、百姓系門中になると神話の天孫氏以下の子孫が祭られ、自分の祖先であり神であると考えられている。この点も、士族系門中と百姓系門中の展開が異なる。祖先神は、祖先から琉球の神に繋がる神化した遠い祖先と考えられ、祖先祭祀の沖縄における特徴と言える。

沖縄では、現在長男相続の観念が強く、日本本土と異なる点を持っている。例えば、長男が早世した場合、日本本土では次男以下の誰かあるいは養子が後継者になるが、沖縄ではそのような日本本土と同じ状況を長男中心の相続に変化させようとしている。長男以外を跡継ぎにした場合、「嫡子押込」と言って長男を相続人から外すことになるので、早世した長男に甥などを養子に取り、あくまでも長男が相続人になることを正しい相続とする。それは、兄弟が同じ仏壇に入らないことで、「兄弟重合」を避けることになる。あるいは、婿養子を継承者とする「他系混合」になり、父系の子孫にならない。あるいは、父系の一族を形成するため、女性が元祖となる「女元祖」を禁止している。

以上のような観念は、戦前における民法の制定で嫡子相続が決められ、沖縄では日本近代化の中で家系は父系血縁の継承によって行うという観念が、ユタや霊的職能者を通して推し進められたと考えられる。しかし、現在では、長男の転出や女性姉妹だけの家族などが増え、長男による家系継承ができない状況が広がっている。挙家離村をしても位牌を長男の家に移さないでそのまま空き家に位牌を残している例や、墓を造らずに仏教寺の位牌堂に位牌を安置する例など新たな祖先祭祀の形態が創造されていることも、門中の新たな課題である。

第9章の『「つながり」としての門中』では、第二尚氏第二代国王尚宣威王の墓に清明祭で4つの門中が集まる事例を取り上げた。尚宣威王の清明祭における墓参は、一般の門中における墓参とは若干異なる。琉球王は、本来その直系王族の子孫および分家系統向氏の名門家によって、玉陵において清明祭が行われる。近年中断されていたが、平成30(2018)年から琉球王家の第23代当主である尚衛氏を中心に40数年ぶりに復活した。しかし、傍系の尚宣威王は玉陵に葬られていない。その墓は不明瞭であるが、尚宣威王が隠遁して亡くなった沖縄市の越來にあると言われている。尚宣威王は、琉球王統の子孫によって祭られることはない。その代わり、尚宣威王と何らかの「つながり」がある人びとによって祭られている。

尚宣維王から系譜で繋がる士族系門中の宗家を中心に、その支系からさらに分かれて帰農した屋取系門中がどのように宗家との系譜を繋いだか、そして百姓系門中がどのように尚宣威王と系譜を繋いだかについて明らかにし、尚宣威王との系譜関係の「つながり」は門中によって多様であることを示した。つまり、尚宣威王との「つながり」は父系系譜で結びつくことが基本だが、その「つながり」が士族系門中の家譜によるものだけでなく、屋取系門中では記憶による系譜を記録による家譜に繋げ、百姓系門中は新たな系譜を創設

することで「つながり」を持つ。「つながり」の内容は異なるが、それをお互いに認めることで共通の祖先として4つの門中が共同で尚宣威王を祭っている。現代における新たな門中どうしの「つながり」を提示した。

本論文では、沖縄の門中を総合的に捉え、門中の歴史とその多様性について幅広く整理、検討を行った。その結果、第一に日中の「間」に双方の属国として存在した近世琉球を視点の中心に置くことによって、琉球士族が中国の宗族組織および日本の幕藩体制における武家の家制度の影響を受けながら、独自の門中制度を形成したことを琉球の家譜などの資料を用いて検討した。これはまさに「間、の民俗」という視点で、近世における琉球士族門中を検討することができたと言える。

第二の視点として、本論文では、現在における沖縄の門中を士族系門中、屋取系門中、百姓系門中に分類し、それぞれの門中の実態を分析することによってその多様性を示した。それぞれの門中に共通することは、系譜の「つながり」によって結び付いている祖先を祭ることである。しかし、この「つながり」は父系系譜を基本としながら固定的なものではなく、さまざまな要因で変化している。屋取系門中の始祖は、その上位の士族系門中との系譜の「つながり」が不明になっている場合が多く、祖先の調査をして士族系門中の系譜との「つながり」を求める例が多くある。百姓系門中では、ある祖先が士族系門中の祖先の落胤である等の由来を系図専門家が探し出し、士族系門中の祖先と新たな系譜の「つながり」を創成することが行われている。このように、祖先との「つながり」は動いており、それによって門中と門中の新たな「つながり」が創成されている沖縄における門中の実態を明らかにした。

この系譜の「つながり」は、世界のさまざまな地域における親族研究の新たなアプローチとして研究が行われている。中国において、文化大革命で大きく変革した宗族が、改革開放以降、復活して中国各地でさまざまな人びとの紐帯が生成され、新たな「つながり」を生み出している。日本においても、伝統的な本分家関係は変容してしまっているが、しかし、姓を同じくする人びとが自分たちの祖先を確認し、その遠い祖先を祭祀する同姓会が現在各地に現れ始めている。これも姓による新たな「つながり」であり、この人びとの祖先をめぐる「つながり」という視点で、今後沖縄と日中の比較を将来の課題とすることができる。